

2022年
4月

マナ通信



今月のマナ通信は、
◎2月の聖書日課（ヨブ記、使徒の働き）
◎土・日曜日の学び（主イエスのたとえ話、イエスに出会った人々）の感想です。

1 ヨブは誠実で直ぐな心を持ち、神を恐れている人でした。そのヨブに不幸が襲い、友人3名がヨブを納得させようとしていましたが、ヨブは自分の正しさばかり主張して受け入れません。これを聞いていた年下のエリフも説得を試みましたがヨブの自我は崩れませんでした。そこで神が登場し暗闇からヨブと問答します。

神は言います。ヨブが神の摂理を暗くしていると言うのです。摂理とは、解説によれば「その知恵と愛とによってすすめておられる計画のこと」と記されています。

では、なぜ立派な信仰を持っているヨブが神の摂理を暗くする者となったのか、理由を探らねばなりません。解説では、彼は自分の正しさという城に立てこもり、その正しさを主張して引き下がりませんでした。これがむしろ高慢につながりました。

聖書の教える正しさは、自分の努力や精進によって獲得するものではなく、むしろ、自分の正しくないことを知って、神に憐れみを求める者に与えられるものです。

ヨブ記はソロモンの時代に知恵文学が花開き書かれたものです。現代のように聖書もなく、十字架の贖い以前に書かれたものです。旧約時代には、まだ、律法しかありませんでした。律法は養育係としての役目ははたしますが、救いに至らせ、信じる者を義とすることは出来ませんでした。律法を守ることで義となることはありません。律法は全て守ることが出来ないのです。

神との問答の中で、神は主権について話されます。神は、ご自分の主権により壮大な宇宙全体を支配しておられます。また、この世界をご自分の計画に従って動かしておられます。唯一の主権者であり、今も生きて働いておられる方が、全宇宙を支え導いておられるのです。

被造物である人間には神のような全知全能、偏在という能力はありません。人間は1秒先のことすらなにが起こるかわかりません。すべて神の御手にかかっています。このように主権は全て神にあることを、ヨブは神との問答で覚醒しました。

当時の律法は人を悩ませるほど根強いものだったのでしょう。ヨブも律法の厳格さに圧倒され、これが全てだと思い込んでいたのでしょう。

「【主】はヨブに答えられた。非難する者が全能者と争おうとするのか。神を責める者は、それに答えよ。ヨブは【主】に答えた。ああ、私は取るに足りない者です。あなたに何と口答えできるでしょう。私はただ手を口に当てるばかりです。」(ヨブ40:1-4)

「私はあなたのことを耳で聞いていました。しかし今、私の目があなたを見ました。それで、私は自分を蔑み、悔いています。ちりと灰の中で。」(ヨブ42:5-6)

ヨブ記は教えています。ヨブのように自分の罪を悔い改めること。そして、友人3人とエリフが試みたように神の摂理は、知識や考え抜いた知恵では伝わらないこと。大切なのは活ける神との出会いが大切なのです。

ヨブは言います。今は私の目があなたを見ました。ヨブは信仰の分水嶺を越えたのです。後にイエス様が地上に人間のからだを持ち現れて下さいました。そして我々の罪の為十字架の贖いをして下さったのです。イエス様を通して神とお会いするばかりでなく我々のところに内住して下さいました。ヨブ記はイエス様を通じて神との出会いを確実にする予表なのかも知れません。(畑中伸之)

神様ごめんなさい。私のところは揺らいでしまいました。本当に神様から全てを断とうと考えてしまったのです。

礼拝にも行かず家で悶々と過ごしていた時、頭に浮かんで来るのは十字架でのイエスキリスト様の苦しみでした。私は涙で一杯になりました。

そして、やっと我にかえりイエス様の苦しみを思い出していました。父なる神から見捨てられた時のイエス様の言葉が出てくるのです。「わが神、わが神どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」

この言葉をお聞きしたとき大きな苦しみに会われた神様のことを思います。そして、父なる神と子なる神との結びつきは絶対的なものだったことを感じます。しかし、子なる神は従順に役目を果たされました。

これに対して、自分のことを思うと恥じることしかできません。神様ごめんなさい。礼拝だけは休まず参加して兄弟姉妹とともに、あなたを真ん中にして私たちはあなたに向かって大きな声で賛美し、お祈りし、交わりを持てることが、私にあなたに出来ることです。これが、あなたを愛することだと教えて下さり、ありがとうございます。感謝します。(畑中千恵子)

2 のたび、1月末からマナで、ヨブ記を学べましたことを感謝します。今までになく私たちの心に寄り添った解説で教えられました。

ヨブは「誠実で直ぐな心を持ち、神を恐れて悪から遠ざかっていた」(ヨブ1:1)人物でした。そのヨブの信仰が、神とサタンの語らいの結果として試みられるのです。ヨブは10人の子どもたち、雇い人と財産を失いますが、ヨブの信仰は揺らぐことはありませんでしたが、試練は続き、彼は全身を悪性の腫物で覆われるとヨブの妻が登場し、夫をなじり、神を呪えと言いつつのです。いきり立つ妻をヨブは「私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわざ受けるべきではないか」と諭します。

このときの妻のことを、解説者は悪妻とは言わず、とても同情的で、改めてヨブと妻がいかに信頼し合っている夫婦であったか考えてみましようとなり、むしろ二人の議論は彼らの愛と信頼の証であったといえるのではないのでしょうかと、ありました。

妻の身になって、その苦しみ、悲しみに寄り添っているというか、解説者もヨブほどでないにしても経験からの言葉と思われました。

さて、38章に至るまでのヨブはさまざまな面から苦しめられても自分の正しさを疑わず、懸命に論じてきたヨブを、主は、あなたは「摂理を暗くする者」(38:2)であると言われました。

それはヨブにとってはまったく思いがけない、まるで横面を張られたことではなかったのでしょうか、と。なぜ神の摂理を暗くする者と言われなければならなかったのでしょうか。それはヨブ記を読む私たちが理解しなければならぬ、最も大切な点です、と。

ヨブはどの角度から見ても「正しい」信仰者でした。ヨブが正しく生きたことは素晴らしいことでした。しかし、彼は自分の正しさという城に立てこもり、その正しさを主張して引き下がりませんでした。自分で正しいと思う、あるいは正しいと主張することは、むしろ高慢につながります。そこに陥ることによって、ヨブは「摂理を暗くする者」になっていたのです。

聖書の教える正しさは、自分に正しさのないことを知って、神のあわれみを求める者に与えられるものと、ありました。ローマ3章22節(すなわち、イエス・キリストを信じることによって、信じるすべての人に与えられる神の義です。そこに差別はありません)とあるようにです。繰り返し読み返したい学びでした。(福島三弥子)



1 節でヨブが三人の友人に責められて、反論する場面にため息と共に圧倒されます。

これだけ冷静にしっかりと、友人に自分の気持ちを伝えることができる精神力と信仰に脱帽です。これだけ友人に責められてしまったら、(責める友人も凄いなあと、思うが)潰れてしまいそうです。ヨブの中にしっかりとした確信があったということです。ここまでの信仰を持てたらなあと、ため息が出ます。

1タラントを託された僕は土に埋めてしまいます。その理由は主人が厳しい人だから減らさないように土に埋めたと、責任逃れの理由を付け足します。ご主人は託したのであって、盗まれないようにとは言ってないのです。

私も託されている僕ですが、理由をつけては増やすことに誠実ではないことに、気が付いています。主に救われることの幸いを、伝えるためにもっともっと真剣に励まなくてはと、思われています。

御霊が私をも励まして、述べ伝えることに熱心にならせてください。(広瀬裕子)

2 節な私を救ってくださって感謝とか、世界の基の置かれる前から選んでくださって感謝とか、思っていました。それでも、あれやこれやの問題に悩み、そのうえ、主より自分を優先するし、だめクリスチャンであることを認めざるを得ません。なんとかならないかと思いつつ、いまだに、足踏み状態。

ところが、ロイドジョンズ兄の本を読むと、何かが大きく違うのを感じるのです。その一つは、「栄光の君がいのちをささげた、あの十字架を思う時、最も貴重なものさえ、価のないものとなり、己の誇りに嫌悪を感じる」というように、主の愛を大きく評価していることによるのかと思います。

私(たち)のために、神の在り方を捨てられないとは考えないで人となり、十字架の死にまで従われたお方、その愛をわかったつもりでいても、ちっともわかっていないんだな—という気持ちになりました。

もしかして知的にわかっているつもりになっていたのかな。それが私の問題なのかと思います。主よ。あなたの愛を私の心にしっかりとわからせてください。(高橋美枝)

3 節で、一行はエリコに着いた。そしてイエスが、弟子たちや多くの群衆と一緒にエリコを出て行かれると、ティマイの子のバルティマイという目の見えない物乞いが、道端に座っていた。彼は、ナザレのイエスがおられると聞いて、「ダビデの子のイエス様、私をあわれんでください」と叫び始めた。多くの人たちが彼を黙らせようとたしなめたが、「ダビデの子よ、私をあわれんでください」と、ますます叫んだ。

イエスは立ち止まって、「あの人を呼んで来なさい」と言われた。そこで、彼らはその目の見えない人を呼んで、「心配しないでよい。さあ、立ちなさい。あなたを呼んでおられる」と言った。その人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た。イエスは彼に言われた。「わたしに何をしてほしいのですか。」すると、その目の見えない人は言った。「先生、目が見えるようにしてください。」そこでイエスは言われた。「さあ、行きなさい。あなたの信仰があなたを救いました。」(マルコ10:46-52)

私の求道のきっかけは、自分勝手なわがままから出た個人的な苦しみや願望などがありました。

旧約でメシア(救い主)の到来はダビデ王家のすえであることが予告されていたので、バルティマイは、主イエスを「ダビデの子」であられると読み取ったのです。その信仰が彼に救いをもたらしました。主イエスはバルティマイのすべてを知っておられます。

さらに、バルティマイは、救われて終わりではなく、主に従う道を歩み始めました。

キリスト信仰の素晴らしさと主の慈愛を感じました。(木村邦夫)

4 節は、冬から春に移り変わっていく高揚感や、春の満開の桜の醸し出す雰囲気、少しだけ苦手です。

昔はそうではなかったか、それに気づけなかったのですが、社会人になった頃からか、そう感じている自分に気づきました。自然と気分が持ち上げられていく感じがして、楽しく思う反面、少し不安定になる気がするのです。

この自覚は自分にとってプラスでした。そういう自分を受け入れることができたからです。そして、最

近その季節の始まりを迎えて、また新たなことに気づきました。この不安感は主からの贈り物なのかもしれないと。

不安の解消法は主に祈ることです。主に近づくきっかけを主が毎年与えてくださっている、そう思うと感謝したくなります。

「しかし主は、『わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである。』と言われました。ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。」(Ⅱコリント12:9)(永井亮子)

5 節は答えられた。『マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。それが彼女から取り上げられることはありません。』(ルカ10:41-42)

この聖書の箇所を読む度に、いつも自分はマルタのようにいろいろなことを思い煩っているな。と思われされます。

ですが、主イエスはマルタ、マルタと愛情深く声をかけられ、マルタに必要なことを教えてくださっています。主イエスは今も一人一人に必要なことを教えてくださっています。私たち一人一人に必要なことを聖書を通して語ってください。

素直に耳を傾け、主イエスのみことばに聴き従う者でありたいです。(外處トミ)

どうしても 必要なのは 一つだけ
主イエスの語る みことばを聴く

2022年2月28日



6 節でこのことにおいてヨブは罪を犯さず、また神に向かって愚かなことを言わなかった。(ヨブ1:22) 神様のみことばにかなう生き方をしたヨブは、神様から試練を与えられた時も神様の御名をほめたたえました。

生きてると試練にあうこともあります。いつも神様が気にかけてくださっていることを忘れず、感謝して歩いていきたいです。(外處光歩)

人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができますように。そのようにして、神の満ちあふれる豊かさまで、あなたがたが満たされますように。」(エペソ3:19)

日々、主の愛に満たされ、その愛を隣人に分かち合う者でありたいです。また、神様に愛されていることを覚えて、いつも神様に目を向けて歩いていけたら幸いです。(外處結実)

さうして、神は人間に仰せられた。「見よ。主を恐れること、これが知恵であり、悪から遠ざかること、これが悟りである。」と。(ヨブ28:28)

神様の偉大なる権威を忘れてはならないことを改めて強く示されました。この全宇宙を造られ、星々も銀河も含む全ての天体を造られ、地球もその中にあるものも、全ての生命体と人間も、そして目に見えない原子の世界に至るまで、全てを創造された神様を忘れて自己中心に生きることの恐ろしさを認識させられます。

その計り知れない永遠のご栄光を持たれる神様に、アダムの罪によって滅ぶべき人類となってしまった中から、僅かな救いの民として選んでいただき、日々全てを采配していただきながら生かされている想像を超えた大きな恵みに改めて深く感謝を覚えます。

その恵みも、主イエス様が、父なる神様に死に至るまで完全に従って十字架の上で尊い血潮を流してくださいましたゆえなのです。

その驚くばかりの恵みを私のような愚かな者にも与えて下さった大きな御愛に想像が追いつかず戸惑う思いですが、悪から遠ざかり聖なることを期待いただいている幸いにも身が引き締まる思いです。(外處徳昭)

さて、一行が進んで行くうちに、イエスはある村に入られた。すると、マルタという女の人がイエスを家に迎え入れた。彼女にはマリアという姉妹がいたが、主の足もとに座って、主のことばに聞き入っていた。

ところが、マルタはいろいろなもてなしのために心が落ち着かず、みもとに来て言った。「主よ。私の姉妹が私だけにもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのですか。私の手伝いをするように、おっしゃってください。」

主は答えられた。「マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。それが彼女から取り上げられることはありません。」(ルカ10:38-42)

星野富弘さんの詩画集に「いのちより大切なもの」というのがあります。私は初めてこの表題を見た時、「いのちより大切なものがあるだろうか？いのちが一番大切なのではないか」と思いました。

何十年も経ってようやく、いのちよりも大切なものが分かってきました。ルカ福音書は、10章38節から11章13節までは、「みことばと祈り」に焦点を当てて記されています。この二つは、神様の祝福を受けるための重要な手段です。

マリアはイエス様の「足もとに座って、みことばに聞き入っていた」とあります。それは乾いている土が、夕立の雨の水をぐんぐんと吸い込んでいくように、マリアの渇いていた心は、イエス様のみことばをぐんぐんとそのまま吸い込んでいったのでしょう。何もかも忘れてただ聞いていたという聞き方です。

一方、主であるイエス様を客に迎えたマルタは、様々な準備のために心を乱していました。マルタも初めからいやいや台所に入ったのではないと思います。イエス様の愛を感じていた姉妹ですから、イエス様



が自分の家に来て下さったということは、実に嬉しいことです。

そのイエス様をもてなす、なんて嬉しいことだろう。だから、さあマリア、あなたはイエス様のお相手をしなさい、私は台所で働くと、初めは心うきうき台所に入ったに違いありません。ここではそういうことは書いていません、いきなり文句を言い出しているマルタですから初めから文句を言っているみたいですが、そうじゃないと思います。初めは本当に優しい心から、嬉しい心から、そして心からイエス様をもてなしたいという、自分の喜びとして台所に入って働いたのです。

ところが人間は嬉しいこと、喜ばしいことをやろうと思うと、つい欲が出て、あれもこれもと品数を増やすものです。つい盛りだくさんにしてしまいます。その盛りだくさんが三皿の用意を考えてやっているうちに、もう一皿差し上げたい、あれも作ってあげたい、というふうにだんだん増えていってしまった。知らない間に増えたその働きが、結局自分の本当の喜びをはるかに越えたものになってしまって、もうそれは喜びでなくなります。

時間が迫り、思うようにはかどらない。そうなってくるといらいらしてきます。そうなってくると人間は、大抵人のせいにしにくくなってくるものです。マリアが手伝ってくればいいのに、いい気になって、ただイエス様のお話を聞いているだけで。私はこんなに一生懸命やって手が回らないのに、全くいい気なもんだ、とだんだんマリアのせいになってきます。

さらに、それを許しているイエス様に対しても不満が出てきます。イエス様ともあろうお方ならそれぐらいのことを分かって注意してくれたっていいじゃないかと、そういう言い方がここに含まれております。「主よ、私の姉妹が私だけにもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのですか。私の手伝いをするように、おっしゃってください。」これはイエス様に対する不平でもあります。

こうなってくると、もう接待なんていうものでありません。本来、接待というのは、客人を喜ばせるため、満足させるための奉仕です。ところがその接待が、結局お客さんに文句をつけることになってしまったのです。マルタは主に、手伝わないマリアを叱ってもらいたかったようですが、イエス様は、いらいらしていたマルタを穏やかに戒められました。

「マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。それが彼女から取り上げられることはありません。」

マルタがこのような思い煩いになったのは、必要以上のものを作ろうと思ったからでしょう。イエス様に喜んで食べていただく、そのことだけを考えたらよかった。そうしたら何もあれもこれも作る必要はないのです。

イエス様は、私たちの「奉仕」よりも「愛」を高く評価されるお方です。奉仕には、うぬぼれや高慢といった汚点がついてしまうかもしれません。しかし、「必要なこと」は主ご自身で私たちの心が専有されることであり、この「良いほう」が取り上げられることは決してありません。

私たちが主のために取りかかる仕事を、主はすべてを高く評価してくださいますが、「私たちにまず必要なのは、主の足もとに座って主のみこころを知ることだ」ということをご存じなのです。

というのは、主のみこころを知って初めて、「私たちは落ち着いた穏やかな気持ちで、また親切な心をもって仕事に当たることができるからです。

そして、最後には、私たちの奉仕もマリアの奉仕のように完全なものになるに違いありません。マリアはこのあとイエス様の足に香油を注ぐこととなりますが(ヨハネ12:1-3)、その香りは今もこの世界を満たしています。

主のみこころを知ることはいかに大切なことであるかと思えます。「デボーションガイド・マナやロマ書のみことばの学びと祈り」を通してそれを得てゆきたいと思えます。(福島勲)

貴重なご感想をありがとうございました。
 次回はマナ3月号の感想を4月10日までに福島兄弟へお寄せ下さい。(永井)